氏　　名	大久保　伊　織（オオクボ　イ　オリ）
学 位 の 種 類	博　士　（文化財）
学 位 記 番 号	博　美　第 379 号
学位授与年月日	平成24年３月26日
学位論文等題目	〈論文〉洋画家髙島野十郎の油彩画における絵画技法及び劣化予防措置 〈作品〉洋画家髙島野十郎の技法研究および模写
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　教　授　（美術学部）　木　島　隆　康
（論文第１副査）	〃　〃　（　〃　）　稲　葉　政　満
（作品第１副査）	〃　〃　（　〃　）　佐　藤　一　郎
（副査）	〃　名誉教授　歌　田　眞　介

（論文内容の要旨）

１．序論

洋画家・髙島野十郎、本名「髙島弥寿」は、明治23年福岡県御井郡合川村において髙島家の４男として生まれた。東京帝国大学（現：東京大学）農学部水産学科を首席で卒業し、独学で画家となった人物である。

近年、同時代の洋画家の作品の多くは劣化が著しく、脆弱である一方、野十郎の作品は、非常に堅牢な作品であるということが修復作業を通して明らかとなっている。その堅牢さの要因として、筆者は野十郎の絵画技法と絵画材料、また、野十郎が行っていた作品の劣化予防措置が有効であったのではないかと推測した。

本論文では、野十郎のこうした絵画技法と作品の劣化予防措置に着目し、自然科学的調査と模写、実験を通してその特性を検証し考察を加えた。

２．調査手法

まず、野十郎の絵画技法を知る上で、人物像を把握するということは重要不可欠であると考え、彼の性格や個性、影響を受けたものや画家を文献等で調査した。次に、作品が所蔵されている美術館や個人所蔵家宅、絵画修復工房を訪問し、蛍光Ｘ線分析装置による顔料の同定や、目視による技法の観察を行った。

さらに、技法の変遷や特徴をより深く調査するため、野十郎の初期、渡欧期、戦後期の作品を個人所蔵家から拝借し、模写を行った。戦後期の作品は、作品が劣化しないようにカンバスの裏面を油絵具で塗布するなどの措置が野十郎本人によって施されていた。このような劣化予防措置方法を重点的に調査し、その結果を基に、この予防措置の有効性を確かめるためのサンプルを作成し、屋外暴露、湿熱、燃焼により検証した。

３．調査結果と総括

髙島野十郎の絵画技法に関して、Ｘ線透過写真による調査で明らかになったことは、シルバーホワイトがカンバスの地塗りとして薄く塗布されていたようだが、描画部分にはあまり使用されていないということであった。描画部分から採取した絵具片の顔料分析では、描画部分の白色の多くに使用されていたのはジンクホワイトであることがわかった。また、蛍光Ｘ線分析調査により、野十郎の初期から戦後

期に至るまでの作品には、赤色にはカドミウムレッド、青色にはコバルトブルーが頻繁に使用されていることが明らかとなった。この２色はどちらも耐熱性や耐光性、酸やアルカリに対する安定性が優れており、変色の恐れが少ない顔料である。

赤外線写真による調査では、完成図とほぼ変わらない構図位置に鉛筆による下素描が確認できた。これは初期から晩年にまで共通していた。つまり、野十郎は始めに決めた構図を制作途中で変更するというような即興的な描き方は初期の頃からほとんどせず、計画的に制作を進めるというスタイルを晩年まで貫いていた。

模写および部分模写による技法の考察で明らかになったことは、初期から晩年まで、描かれているモチーフひとつひとつが下素描に忠実で、ぬり絵のように個々に塗り分けられていたということである。例えば作中の空、山、雪、地面などは、それぞれの絵具が輪郭線で交わり合うことがなく塗り分けられていた。つまり、彩色する際にも画面上で即興的に彩色するのではなく、パレット上で絵具を混色させ、ある程度完成に近い色を作ってから、モチーフひとつひとつを輪郭線からはみ出すことなく彩色するという方法であった。

初期や渡欧期は筆触が粗かったが、戦後期に入ると明暗部の区別なく絵具の厚みを均一にするように筆致を並べ、筆致そのものが極端に微細になり、点描に近い技法に変化した。こうした技法は、後の耐久実験により、重ね塗りを何度も行った彩色方法や一度に多くの絵具を使用し厚みのある画面を作る彩色方法に比べ、高温多湿の条件においても亀裂や退色を最小限に留めるという結果が得られた。これは前述のような並列させた筆致の効果であると十分に推測できる。つまり、野十郎の技法は、総合的にも非常に安定性の高い絵画技法であると言える。

野十郎が行っていた作品の劣化予防措置に関しては、現段階での調査では、渡欧期を過ぎた頃から徐々に施され始めていたことがわかった。その措置内容は、カンバスの裏面に油絵具を塗布する、カンバスを２枚重ねにして木枠に張り込む、裏面を厚紙で覆い密閉させるというような、どれも湿気や振動などから支持体を守るということを意識したものであった。また、これらの措置は、絵画技法書などに記述されている措置方法よりもさらに追求したものであり、野十郎が独自で編み出した方法であると言える。また、これら措置の効果を屋外暴露、湿熱、燃焼による実験で検証した結果、作品の耐久性が増し堅牢となることを証明することができた。

本研究では、安定性の高い絵画技法と、制作段階において劣化予防措置を行った髙島野十郎という画家の作品分析を通して、その有効性を証明できたばかりでなく、新たな措置方法も示すことができた。このような措置方法を参考に、筆者は画家と言われる人達が作品保存の意識を持って絵画制作に取り組んでいくことを望む。

（博士論文審査結果の要旨）

髙島野十郎の「雨　法隆寺塔」は床下に放置されて浸水、カビ害を受け、その後さらに火災にもあったが、何とか修復された。申請者はこの絵画の高い耐久性に注目して、高島の絵画技法を調査し、彼が行った劣化予防措置を実証的に研究した。

第１章では髙島野十郎の人物と本研究にきっかけとなった「雨　法隆寺塔」の修復に関する記録をまとめている。

第２章では髙島の画風を概観している。

第３章では髙島の初期、渡欧期、戦後期の作品について科学分析結果を踏まえて模写を行い、彼がより安定な画材を用い、下描き線にそって最終的な色を１回で画面に載せて行く手法をとることで、薄い絵画層からなっていることを明らかにしている。

第４章では油彩画の劣化予防処置を概観するとともに、髙島野十郎が独自に試みた方法を実作品で調

査している。その結果はキャンバス裏面への絵具の塗布、場合によってはキャンバスを裏面に張り込む処置、そして、裏面の保護のためにボール紙などでふたをする処置に類型化してまとめている。

第５章では以上の研究で明らかにした髙島野十郎の薄塗で絵具をほとんど重ねない技法と、各種の保護処置のモデルを施した試料を作成した。これらの試料に対して湿熱劣化処置、太陽光への暴露処置、床下での放置処置、火炎を当てる処置を行い、髙島野十郎の絵画技法と劣化予防処置が適切であったことを実証的に明らかにしている。

火炎に対する安定性までは必要ではないが､本研究で明らかにした絵画技法を含めた劣化予防処置は、今後保存性の高い油画を制作する上で、考慮すべき点を示しており、重要な成果と考える。さらに、髙島野十郎とその絵画技法についての実証的な研究も、保存修復研究の新しいアプローチとなりうる可能性を示しており、評価できる。

以上、本論文は博士（文化財）の学位を授与するのに十分な内容の論文である。

（作品審査結果の要旨）

髙島野十郎の絵画材料と絵画技術を検証、考察するために、髙島野十郎作「壺とりんご」「小さき停車場」「雪の山辺」を、大久保伊織は模写している。これら３作品が作品審査の対象になっている。「壺とりんご」は、初期作品であり、岸田劉生などの草土社の画風に近い作品である。「小さき停車場」は、渡欧作品であり、岡鹿之助を思い起こされる。「雪の山辺」は、戦後期作品であり、日本回帰へと向かい始める時期である。

模写作業の前に、支持体、地塗り、絵具層にどのようなものが使用されているのか事前調査を行なっている。目視、赤外線写真、Ｘ線透過写真、クロスセクションによる顔料分析などである。その結果に基づき、できるかぎり現物に近い支持体をはじめとする絵画材料を使用して、模写作業を進めている。面相筆を使用し、鉛筆による下素描にそって、丁寧に塗り分ける描法であり、使用される油絵具は基本的に鉱物性無機顔料（鉛、カドミウム、コバルト、鉄、亜鉛など）がほとんどであり、耐久性、耐光性に優れた安定性の高いものである。

「小さき停車場」は、全図を模写しているが、他の２点は一部分を切り取った模写（全図の半分位）である。いずれも、現物を横においての作業であったので、現物が持っている色調だけでなく、絵具の付き方や、画肌の雰囲気までもが再現されている。他方、大久保伊織は模写することによって、劣化予防措置に対するなみなみならぬ髙島野十郎の配慮を、確認している。

以上のことから、本申請論文における作品審査において、博士（文化財）の学位を授与するのに十分な内容および水準であると判断できる。

以上

（総合審査結果の要旨）

本論文は、油彩画保存修復の分野において、画家髙島野十郎作品の高い耐久性に注目して、髙島が用いた絵画技法および絵画材料、さらに、作品に施した劣化予防措置について、その効果を実証的に研究し証明した内容となっている。

研究手法は、まず研究のきっかけとなった「雨　法隆寺塔」の二度の被災に耐えた作品修復記録の紹介からはじまり、次に髙島作品の画風の変遷を概観している。加えて、髙島の絵画技法と絵画材料を検証する目的で、初期、渡欧期、戦後期にわけて、科学分析結果にもとづいた３作品の模写を行っている。模写による検証の結果、髙島の油彩画の耐久性を求めた絵画技法と絵画材料の特徴を大久保伊織は見出した。

劣化予防措置については、まず油彩画技法材料の観点から劣化予防措置を概観し、髙島野十郎の措置を実作品の調査によって比較検討している。その結果、髙島独自の措置を見出している。一つに、画布裏面に油絵具を塗布した処置、二つに、油絵具を塗布した画布の二重張り、三つに、裏面にあてた保護のボール紙等である。

５章では、調査結果を踏まえて、絵具を塗布したサンプル試料を作成し、湿熱劣化試験、太陽光への暴露試験、床下への放置試験、火炎を当てる試験によって髙島作品の耐久性を実証的に証明している。

模写においては、「壺とりんご」「小さき停車場」「雪の山辺」の３作品を行っている。これらはいずれも自然科学的手法を用いて詳細に調査分析され、その結果にもとづいた模写である。全図は「小さき停車場」１点、他の２点は部分模写である。所蔵者の好意によって３作品を借り受け、実作品を横に置いての作業であった。審査では、実作品を熟覧しながら描かれた模写作品に対して、現物が持っている色調や、絵具の付き具合、画肌の風合いまでも再現されていると高い評価であった。

惜しまれた点として、部分模写ではなく、３点とも全図模写であったならば、さらに実証性の高い結果が得られたと考える。

以上の内容は、いずれも博士（文化財）の学位授与に十分な水準にあると判断できる。

以上